

ヨシュア記  
使徒行伝

第7章 1節  
第4章 32節～第5章 11節

説教 本庄侑子 牧師

使徒行伝は、誕生して間もない教会の様子を繰り返して伝えます。主イエスの復活は、それを事実と信じ、語り伝えることによるだけでなく、洗礼を受け、古い自分に死に、新しくされた人々の姿を通して証されました。

信仰は心の中だけのものではなく、具体的な生活として現れ出るものです。初期の教会に主イエスの復活を証しさせた具体的な生活。それ度があったのではありません。共産主義的な制度がなかったのではありません。洗礼を受けたら財産を全て売り払い、教会に献金しなさいと指導があったのでもありません。あくまでも、自分のもものは自分のものでした。その上で、助けを必要とする人がいたら、志を与えられた人が自由に捧げていました。

日野原重明先生は「命とは君が持っている、君が使うことのできる時間のこと。君がしたいようにできるもの」だとおっしゃいます。教会に現れ出た新しさはエゴイズムから解放された命の新しさでした。自分の時間やお金は自分のために使うのだというこだわりから解放されていたのです。

私もこれまで、教会の新しさに触れてきました。留学した時、キリスト者の先輩が時間やお金を惜しみなく使って、助けてくださいました。お返しができず申し訳ないと伝えると、「お返しは、これから出会う困っている人にしてあげて。それが私にとって一番嬉しいお返しだし、神様が一番喜ばれることだと思うから。」とおっしゃいました。

また、ある伝道集会との出会いも転機となりました。自分と変わらない二十歳前後の日本人留学生たちが、毎週金曜夜、何十人分もの食事の用意をし、日本人に伝道するための集会を開いていました。司会の人は言いました。「なぜ僕たちが一番遊びたい時間を捧げて集会を開いているか。それは、あなたにイエス・キリストのことを知ってほしいからです。」新しい命の輝きに触れて衝撃を受け、私も自分から集会を手伝うようになりました。

留学生だったので、一生懸命勉強していましたが、それまでは、日本人たちを見返してやりたい、有名大学に転学するんだ、などの思いに突き動かされるようにして勉強していました。しかし、その動機もすっかり変えられてしまいました。

今日の聖書箇所、アナニヤとサツピラの事件が記されています。バルナバも、アナニヤとサツピラも、表面的には同じことをしたのです。しかし、その動機が違ってました。人に認められたいという自我、罪が、アナニヤとサツピラの心一つにっていました。

洗礼を受けた後も、的外れな命の使い方をし続ける私たちがいます。主はそんな私たちを放

置なさいません。礼拝に招き、御言葉を通して罪を明らかにし、私が命がけで与えた新しい命は、そんなことに使うための命ではないと語って下さるでしょう。罪から救うためにこそ十字架についてくださった主イエスの愛や、新しい命に生きる教会の姿を目の当たりにさせることによって、罪を滅ぼし続けてくださるでしょう。

留学中、土曜朝8時という一番寝ていたい時間に、韓国の方々が自主的に集まる、日本のための祈り会にも誘われました。戦争中、日本語を強制的に教えられた人たちが、日本のために涙を流して祈っておられました。祈り会の後、日本人の私を笑顔で迎え入れ、日本語でもてなしてくださいました。毎週、韓国料理屋さんに来て行って、お腹いっぱい食べさせてくださいました。

その祈り会で、新しい命の輝きと祈りに取り囲まれて、私は泣きながら祈っていました。私は一体、何をしていたんだろう。新しい命をなんて無駄遣いしていたんだろう。神様、ごめんなさい。これまでの私を赦してください。ここからもう一度、新しく歩み直させてください。気づいたら自主的に、その祈り会に参加するようになりました。

その後、私の変化に気付いた周囲の人たちも参加するようになり、ついには自分たちの教会で日本人への伝道集会を開くようになりました。誰が強制したわけでもない。みな喜んで、自分ができることを精一杯捧げるようになっていきました。神様、私たちを救って下さってありがとうございました。これからは御心のままに、あなたのご用のために用いてください。ただその祈りにおいて、心も思いも一つとなっていました。そして、そんな私たちの姿に好意を抱いて礼拝に招かれ、洗礼を受ける人々を目にする事となりました。

私は確信しています。私たちの具体的な生活は、人の心に触れ、キリストのもとに導くということ。新しい命に生かされる生身の人間、私たち教会を通して、神様はこれからも力強く働かれる。

使徒行伝で最初に「教会」という言葉が出てくるのは、アナニヤとサツピラが滅ぼされた時です。罪を放置せず、打ち負かして下さる主の戦い、主が勝利して下さる罪との戦いの中で、私たちは教会になる。礼拝ごとに、これまでの自分とは違う、キリストにある新しい自分に出会い、キリスト者としての姿が鮮明になっていくのでしょう。

2018年、私たちが教会としていよいよ新しく立てられていきますように。そのような私たちを通して、私たちの隣人に救いの御手が伸べられていきますように。

(記 本庄侑子)